



C.P.I. The Committee for Promotion to Innovate Japanese
People by Educational and Cultural Contact, since 1979
教育文化交流推進委員会

1810005 東京都三鷹市中原 2-16-9 TEL& FAX:0422-49-3808
E-mail:cpimate@gmail.com URL <http://www.cpi-mate.gr.jp>

平成28年度(2016年度)事業報告

平成28年4月1日～平成29年3月31日

平成29年6月17日総会資料

認定 NPO 法人 C.P.I.教育文化交流推進委員会

風を呼び込めてこそ、力になる

会長 小西菊文

C.P.I.の初代顧問で、総合研究開発機構（NIRA）第二代理事長でいらした下河辺淳先生が、昨年8月13日、惜しまれながら亡くなりました。感謝の想いをこめて、原点を振り返ってみたいと思います。

30年前にスリランカの一軒の小屋から始まった、C.P.I.教育里親奨学制度。営々と頑張ったC.P.I.会員の皆さんの成果は、今、7000名を超える人材に実を結んでいます。

その当初、私は教育関係の大組織を持つ某協会を通じて教育里親さんの募集を頼もうと考えておりました。私の恩師で協会の会長・生江義男氏の後ろ盾もありました。しかし、教育里親制度のよさが理解されてくるうち、その協会の幹部会に、それをビジネスにしようとする動きが大きくなってきました。1988年の年末も押し迫った日に、生江先生に呼ばれ、「小西君、この件は、協会からはずしたほうがいいよ」このままでは活動の動機づけが間違った方向に行く怖さがある、と言われました。

現地で小さく始まった奨学支援を、もう

「君のしようとしていることは、風を呼べるものだ。必ず力が集まるから頑張れよ」

この言葉で勇気がわき、昔からの友人でありました日経新聞の記者藤巻さんに、奨学生の親からの手紙をみせ、貧しくても頑張りぬく学生を支援したいと率直に応援を頼みました。彼は、それを社会部の秋山記者に渡しましたところ、「自分も里親に育ててもらったので、教育里親の大切さはわかる」と、応援の記事にして下さいました。1989年1月24日、社会面5段抜きの記事です。

少し増やせるのではという私の小さな想いが、その協会の、少なくない人々の思惑で曲がっていき、その結果が私を苦しめることになるという切羽詰まったときでした。

しかしありがたいご忠告だったと思います。

一方、現地では、1988年のお正月に、在スリランカ日本大使が、ある意味「積極的誤解」をされて、「C.P.I.の小西さんが、来年には奨学生を大幅に増やしてくれますからね」と現地新聞に話をして下さったことで、大きな『期待記事』になっていました。そのような現地状況の中での緊急事態です。

まだ39歳で、若かった頃の私にとりまして、相当のプレッシャーでした。困った私は、下河辺先生に相談しましたところ、一時間以上も、じっと話を聞いてくださり、ひと言だけ、強く言葉を下さいました。

その記事がきっかけで現在のC.P.I.の礎が築かれ、今日の教育里親制度のひろがりとなりました。

当会の顧問に就任されたときに下河辺先生の下された署名入り推薦文は、C.P.I.の事務所の入口で見守って下さっています。

私は、いまも、あのときのひと言を大切にしています。有難うございました。

平成28年度(2016年度)事業報告

1. 教育里親制度プログラムに係る報告(定款第七条1項1号)

(1) 貧困家庭にありながら学業成績優秀な学生への教育支援を行いました。

① スリランカ教育支援活動内容は、会員の高齢化等で減少のため、教育里子過多となりました。

対スリランカ教育支援金の、2016年度 対象学生数

学年	9年生	10年生	11年生	12年生	13年生	AL試験再受験者	合計
人数	75	41	77	36	107	151	487

スリランカ教育支援の前期計画と実績対比

(金額単位:千円)

	平成 28 年 計画	平成 28 年 実績	備 考
里親数/CPI 里子数(人)	490/490	448/487	
認証式支給学用品	4,059	3,498	平成26年度に比べ学用品支援をルピー値で増額できた。
毎月支給奨学費	8,442	7,274	補習クラス、特待生補助、通学、薬代等(同上)
年内支給奨学費	264	228	通学靴、制服仕立費、写真代等(同上)
(小計①)	(12,765)	(11,000)	
地域ボランティア費			地域センターの日常活動実費はSNECC負担
調査・報告作業費			日本側の負担は、広報・報告予算で行う。
(小計②)	0	0	
合計	12,765	11,000	2017年度からの本格的増額に対処する準備を完了した。

② インドネシア教育支援活動内容は、ほぼ年度初めの計画どおりとなりました。

対インドネシア教育支援金の、2016年度 対象学生数

学年	中学3年生	高校1年生	高校2年生	高校3年生	大学生	合計
人数	32	34	40	23	24	153

インドネシア教育支援の前期計画と実績対比

(金額単位:千円)

	平成 28 年 計画	平成 28 年 実績	備 考
里親数/里子数(人)	151/153	147/153	
中学生学費	508	521	中高生への学費支援(学年別支援計画に基づき、学費・試験費用を計算。現地通貨ベースで増額できた)
高校生学費	1,220	1,247	
中高生試験費	上記に含む	上記に含む	
大学生学費	472	380	大学1、2年生までの学費支援(同上)
教育里子会の活動	564	507	教育里子の集会・彼らの社会活動などを支援
調査・日常把握等	782	802	地域リーダー・アシスタント経費、電話・郵送・交通費等実費 その他の地域経費
電話・郵便・交通費等			
(小計)	(3,546)	(3,457)	
卒業生会活動支援費	380	0	奨学生修了者会活動は現地の独自採算。
合計	3,926	3,457	2017年度からの本格的増額に対処する準備を完了した。

(2) 教育里親に対する里子の状況報告を行いました。

- ① スリランカの現地報告ステューティ誌を 12 月に発行しました。
- ② インドネシアの現地報告クルアルガ誌を 12 月に発行しました。
- ③ スリランカ教育里子への支援を行う正会員に、普通課程および高等課程修了試験の結果報告ならびに年末の状況報告を行い、里子たちが描いた絵を『本の葉』として贈りました。
- ④ インドネシア教育里子への支援を行う正会員に、年末の状況報告を行いました。

2. C.P.I.の活動へ、多くの市民の参画を広げる活動に係る報告(定款第七条 1 項 3 号)

インドネシア政府から、インドネシアと日本間での地域産業別組合同士の協働、或いは、インドネシア青年の能力開発を行う、仕組みづくりに係る協力を求められています。これは、2008 年から続けている日本インドネシア市民友好フェスティバルの意義に合致しています。そこで本年の同催事では、秋田県・茨城県の両地方政府の参画を得て、上記の仕組みづくりの芽をつくりました。

催事実施期日：平成 28 年 10 月 15 日～16 日

催事実施場所：東京・代々木公園並木通り

“日本-インドネシア市民友好フェスティバル 2016 in YOYOGI” 報告



C.P.I.JAPAN は、2016 年から、日本の組合および中小企業の海外活動を実質的に統括している地方自治体との、共同開催を呼びかけています。



元・副大統領 トゥリ ストゥリスノ氏により、開会が宣言されました。両国の友好に資する二日間にしようとの力強さも暖かいご挨拶でした。



来日した クリダ ヌサンタラ基金会の皆さんは、インドネシア各地の衣装を紹介しながら、竹の楽器アングルンによる合奏を行いました。



クリダ ヌサンタラ基金会で選抜された 34 名の高校生たちは、元気いっぱい舞踊を披露しました。彼らは大変に礼儀正しく、よい交流ができました。



西パプア州政府から派遣された有名な舞踏団による勇壮な舞い。初めての来日で、その勇壮な舞踏は、日本の人々に、文化を知って国際交流をしたいとの興味を引き起こしていました。



西パプア州政府の説明用テントです。日本の人々は、その特色ある様子にもつばら興味をもち、一緒に写真を撮りたがる人が絶えませんでした。友人知人に写真を見せて自慢して下さることが、交流の第一歩になると言えるでしょう。



多くの聴衆が、日本語で行われた西パプア州の文化についての説明に聞き入っていました。低いステージ設定は、このようなことには役立つようで、ダンスのステージとしては少々不満がある様子だった 知事第一秘書からも好評でした。



このフェスティバルは、初の西パプア州からの来日を実現させ、2020年の東京オリンピックを前にして様々な交流に役立ちました。



今回のステージ設定は、低い舞台、奥行きを長く、前舞台を広げて、照明は左右の低い位置からの広角照明、奥は天井から拡散照明としました。日本の舞踊関係者からは、プロの舞踊家を含めて「観客の反応がピンピン感じられてよかった」と、思った以上の好評で、有難いことでした。



レストランのお客様は、10万人の来場者で、途切れることない行列が続きました。「ケヤキ並木始まって以来の人出」とは、公園関係者の話です。



インドネシア食材卸の出店者は、当初は出店場所を心配していましたが、まったくの杞憂におわり、お客様が途切れることなく、喜んでおられました。



共同開催の秋田県・茨城県の職員の方々は、出店コーナーで売り切れが続出し、予算設定段階での来場者予想の10倍の来場者に驚かれています。今後のよい弾みとなったと考えます。



2016年度は、21名の青年たちがボランティアで参加して下さいました。来日した高校生たちの面倒ほか本当に助かりました。インドネシア政府から感謝状が出ました。この場を借りて厚く感謝を申し上げます。

3. 教育開発により、貧困な人々の自立を助ける活動に係る報告(定款第七条1項2号)

- (1) 学校飲料用水質改善; インドネシア小学校への浄水施設設置を継続推進しています。インドネシアの地下水は飲料水として水質に課題を抱えている地域が多い。特に東インドネシアに於いて顕著です。地方行政およびコミュニティとの連携をしつつ、水質改善を図る必要があります。2014年度に設置した東ジャワに於けるパイロット施設を広報し、日本企業 CSR 事業資金の導入を図ってきました。しかし、ほとんどの日本企業の CSR の実態は、企業自身のための事業に限られています。C.P.I.としては、寄付された企業を政府表彰することまで訴えましたが、資金が集まりませんでした。唯一戴いている日立建機株式会社 CSR 部門からの資金を早急に生かす必要もあります。

そこで、2017年度から、「個人が支える社会活動」に立ち戻り、薫風を呼び込みたいと考えます。個人向けチャリティ活動により資金を集め、「飲料水浄化プロジェクト」を進めることにします。インドネシアの人気歌手 TULUS さんが協力して下さることになり、2017年度から、日本で開催するチャリティコンサートを楽しんで戴きながら、事業実現を図ろうということで準備を開始しました。次のホームページは、スマホで見やすくしてあります。インターネット検索で見つけてください。

<http://www.indonesia-festival.com/TemanTULUS.html>

TemanTULUS Japan

← 検索

(2) 東インドネシアの島々で Marin-Eco(資源管理を伴う漁業)を教える活動の継続推進を図っています。

JICAとの草の根技術協力事業提案を2016年6月～2017年2月にかけてJICA職員と合同協議し、その結果出てきた計画改善を図る検討会を、2017年3月に現地で行いました。

2017年6月のJICAへの同事業提案に繋がりたいと考えています。

4. 会費・教育支援金の改定の結果報告

C.P.I.は、任意団体時代の1991年総会で会費・教育支援額を決めて以来、26年間、その金額を変更することなく、教育支援活動を行ってきました。円高の波の助けがあったことで、実現できたとも思います。

しかし、教育里子に必要な教育支援が、教育里子たちの学業継続にとって、年を追う毎に不足しがちになってまいりました。円安の逆風も吹いています。また、日本国内の運営に係る費用も、様々な手段で経費削減をしてきましたが、消費税だけをみても8%が当初から比べて増加しております。そこで、根本的な解決のために、会費・教育支援金の改定を2016年総会に諮り、ご承認議決を戴きました。ありがとうございました。

教育支援金を現行の年間24,000円から4,000円増額し28,000円に、正会員会費を現行の年間12,000円から2,000円増額し14,000円に改定と決しました。

平成29年度に改定を完了できますよう、ご協力をお願い申しあげております。

(1) スリランカ里子教育支援の実情と、教育里親を増やすお願い。

平成26年度までは、何とか教育支援額24,000円で現地直接援助金を賄うことができていました。

しかし、この間、物価や補習学校費用の値上りにより、教育支援額の増額が必要となっていました。

現地貨幣(スリランカルピー)に対する円対現地通貨の価値は、平成28年度に一時的に円高となり、おかげで現地通貨ベースでの支援増額ができましたが、本年また円が下がり、やはり、数年前からの見通しどおりとなっております。

平成29年度は、予定どおり、本格的な教育支援金増額に踏み切ります。

ただ、里親が減りました場合、現役の奨学生をやめさせることはできないので、困ったこととなります。

どうか、教育里親をお続けください。そして、新会員をご紹介くださいますようお願い致します。

(2) インドネシア里子教育支援は、日本の未来にとっても大切な役割となっております。

インドネシアでは、高校校の学費値上に続き、中学校学費も値上りしてきました。

<義務教育学費無料化>には当分ならないと思われます。

中学3年生および高校3年生の、卒業試験費用も、年々値上りする傾向にあります。

教育里子たちはとても優秀で、塾に通わずとも学校の試験成績は高い水準にあります。

このような学生に対して手を差し伸べる教育里親制度は、インドネシアの民衆から支持されています。このことは、これからの日本にとって大切なことと考えます。

こちらができるときに精一杯のことをしていくことで、『助け合いの環』ができるのですから。

とにかく今は、学費と試験費用の値上り状況を見極めながら、年々対応できるようにしております。

皆様の、教育支援金値上げに対する暖かいご理解、ご支持に、厚く感謝をもうしあげます。

また、現地で奨学修了者会のコミュニケーショングループは、一挙にはありませんが、少しずつ大きくなっています。4000人以上の奨学修了者のネットワーク目標に近づくよう期待しつつ、次回の現地会報では、奨学支援に加わる現地の修了生たちをご報告申しあげたいと考えます。